トミエ・オオタケ（大竹富江）《Untitled》 2008

ゆるやかに、のびやかに、自由に進む白い曲線。「見る人の感じ方を大切にしたい」と作品に題はつけなかったそうですが、あなたはどんなイメージをもちましたか？
オオタケは 1913 年京都で生まれ、ブラジルへ移住。独学で絵を描き始め、幾何学的な抽象絵画や彫刻を制作し、2015 年に 101 歳で亡くなるまでブラジルを代表する作家として活躍しました。
大正生まれのハイカラ女性が遥かブラジルで好きな道を極めて成功を修める、なんて素晴らしいのでしょう！
その精神が作品にも表れていると思いませんか。

ガイドスタッフＴ

ガイドスタッフ S

中西夏之 《柔かに、還元》 1996

紫・黄緑・灰色・白、抑えられた色彩が水面で交じり合う波紋のような大画面にあなたは何を感じますか。

一見、即興で描かれたように見えますが、実は下図となるドローイングを描いてはカンヴァスに向かい、またドローイングに戻って確認しながら再びキャンバスに戻るという、長い時間と思索の積み重ねによって制作されました。そうやって何枚も描いたドローイングには、「白く！白く！柔かに還元へ」と作品のタイトルにつながる中西のメモが残っています。この連作から彼の思索を追体験してみてはいかがでしょう。

ガイドスタッフS

石川順恵
《ゆるやかに開く窓から空 2001－1》　2001

スクリーンに映し出された影や形に、立体や空間を感じることはありませんか？
様々な技法で何層にも重ねられたこの作品は、異なる画像が互いに関係し合うことで生み出された映像空間のようです。透明感のある奥行き、その上ののびやかな線に誘われて視線を動かすと風が通り抜けるように空間が変化して、カンヴァスを超えて広がっていくようです。作品名《ゆるやかに開く窓から空》はゴダールの映画『右側に気をつけろ』のシナリオから採られたとのこと。石川さんは、「ゆるやかに開く窓」「窓から空」ということばを組み合わせることで、時間的な移行と空間的な移ろいを兼ねる、と考えたそうです。

石川順恵　《春分 5》　2001

ガイドスタッフ N

描かれ方を見てみましょう。

① 水で湿らせたカンヴァスにアクリル絵具を、大きなストロークで画面全体に染み込ませ

② 濃い黒点をリズミカルに散らし

③ 砂を混ぜた白い絵具の線で、ある形をプロジェクターで拡大投影してくっきり描く

この 3 つの要素は、レイヤーを一枚ずつ順に重ねたように、①＋②は奥に、③は手前に見え、絵に三次元空間を与えるからフシギです。墨の濃淡を生かす水墨画技法を応用しているのは、東洋的な感覚も意識されているのでしょうか。画面内の各要素が独立しながら関係しあって作りあげられる絵画を求めるという作家の世界を感じてみてください。

堂本右美 《此所彼所》 1996

ゆるく溶いた絵具を幅広の刷毛を使い、掃くようなストロークで大胆な色面を描いています。太い枠に遮られた向こうは、作者がいつか見た風景だったのかも知れません。夕凪時の海のような画面を隔てるものは、はっきりした線や面だけでなく滲(にじ)みや色の重なりです。右手からは何かが大きく侵食してきていますが、それはたっぷりと湿気を含み、いっそう明るく同じ色調を帯びていて、全くの異質なものとは思えないような気がしませんか？ 作者は日常生活を主題に、哲学や社会的メッセージを示すことがアートであると語っています。

ガイドスタッフ K

李 禹煥 《風と共に》 1987

さあ、そっと耳をすませてみてください。
「さらさら」…？それとも「ざわざわ」…？作品から何か聞こえてくるでしょうか。
ここにあるのは、幾つもの筆あとと広々とした余白だけ。けれど眺めるにつれ、何かの生物にも見える筆あとが、柔らかな光と風に包まれてゆらめいたり、遠くにある光に向かおうとしているようにも思えてきます。カンヴァスの外まで広がるような景色の中、そこにどんな音があるだろうと想像したくなる作品です。ところで私は「するする」という音を感じました。脱皮した謎の生命体Xが… 続きはご想像ください！

ガイドスタッフT

宮脇愛子　《作品》 1960-61

この粒々は何でしょうね。タイヤか何かが走った跡にも見えるような… この作品をじっと見ていると、どこまでも広がっている何かを見ているような気になりませんか。
この凹凸は生乾きの油絵具に大理石の粉を混ぜたものを使って作られました。見る位置によって白いカンヴァスがなんだか白一色とは違って見えるのも不思議です。ゆっくり眺めて自分だけの色を見つけに心をはせてみて下さい。

ガイドスタッフ H

エンリコ・カステッラーニ
《拡散する表面　[Superficie Divergente]》 1966

規則的に打たれた点の周囲に、陰影が描かれた、幾何学的な抽象画。そう感じながら作品に近づいていくと、実は、キャンバスの裏と表から打ち込まれた釘による凹凸が、光と影による模様を作り出していることに気づきます。この作品は、平面のカンヴァスを白一色に塗った「絵画」なのでしょうか？それとも、空間の中に張られた布による「彫刻」？平面の絵画として見ると陰影が作り出す立体が意識され、立体の彫刻として見ると平面としての布が意識される。「絵画」と「彫刻」という境界を撹乱（かくらん）する作品です。

ガイドスタッフＫ

アグネス・マーティン 《無題 #3》 1984

正方形の白い絵画。無の世界。何もないのでしょうか？つまらないと通り過ぎないで近寄って見て下さいね。ザラザラした下地にかすかな鉛筆の線。作家の手で一本一本ていねいに描かれています。全て手書きの線は、心の揺らぎを写す様にゆらゆらとかすれたりもしています。

「好きなのは水平線」と言い、ほぼ 40 年間水平線と格子の作品を描き続けた女性アーティストです。好きを信じて続けて良いのよと励まされているようですね。

「私の絵には何もない、あるのは明るさと光」マーティンさんの言葉です。どんな光を感じましたか？

ガイドスタッフ O

ガイドスタッフ M

ルーチョ・フォンタナ
《空間概念　神の終焉 [Concetto Spaziale - Fine di Dio]》
1964

みなさんは今、こちらの作品を前にしてどのような思いを巡らせていますか？ 私は幼い頃の思い出が蘇りました。ホットケーキをフライパンで焼くときに、生地からプツプツと小さな泡が出てくる光景をよくじーっと眺めていました。泡がぷくっとふくれて割れたあとに出来る小さな穴の向こう側はどうなっているのか興味津々だったのです。
フォンタナの作品の穴の向こうには、どんな世界が広がっているのでしょうか？ 作者はどんな気持ちで穴をあけたのでしょうか？ みなさんに考えて欲しくてフォンタナはこの作品を制作したのかもしれませんね？！

三瀬夏之介 《山ツツジを探して》 2011

「山ツツジを探して」山に分け入り、一面の花を見渡せる場所にたどり着きました。「ああ、きれい！」と見惚れていると、にわかに風が吹き、辺りが暗くなってきました。今では雲に囲まれ、どこまでが山なのか分からなくなっています。私は絵の中に入ってそんな想像をしました。山形の山河を愛し、桃源郷と表現した作者の三瀬は移住2年目でこの作品を制作しました。自然と対比した時のささやかな人の営みを表現するように画面右側の中ほどに小さく船が描かれています。その斜め左下にはこの作品名が刻まれた石も。探してみてください。

ガイドスタッフI

康 夏奈（吉田夏奈）《花寿波島の秘密》 2013

ぽこぽこっとかわいらしい形をした、大小 2 つの無人島、花寿波島（はなすわじま）。海岸から眺めただけではわからないこの小さな島の秘密を、康夏奈さんが教えてくれます。
康さんはこの作品をつくるために、20 日以上も海に潜りました。そして島をぐるぐるまわって見たものを、色鮮やかなクレヨンで大胆かつ繊細に再現しました。
康さんが海の中から見た島の景色が、今度は私たちのまわりを取り囲みます。作品の真ん中に立ってみてください、そこは一瞬にして海の中です！

ガイドスタッフ K

康 夏奈（吉田夏奈）
《No dimensional limit anymore》 2011-14

描かれた風景が山型に盛り上がって、まるで瀬戸内に浮かぶ島々のようです。康さんは、複雑な地形と豊かな自然に恵まれた小豆島に魅せられて、島に移り住み作品を制作しました。小豆島に住む方々は「これは私たちの島だ」とすぐに解るのだそうです。島の DNA が埋め込まれているのですね。
島々を見上げたり見下ろしたりしながら歩くと、まるで鳥になって空から眺めている気持ちになりませんか。深い緑や色づく木々、季節によって変わる景色も見えますね。雄大な自然が、床や白い壁の余白にまで広がっていくように感じます。

ガイドスタッフ S

康 夏奈（吉田夏奈）
《SHAKKI - black and white on the lake》 2009

人の気配のない雪景色。寒そうなここは何処？ここはサンタクロースの国といわれるフィンランドの森の中の凍った湖。作品を見ていてください。サンタを手伝う小さな妖精のようにせっせと動き回る人がいます。
たった一人で黙々と、ひたむきに作っているのはSHAKKI、フィンランド語でチェスを意味します。この人、康夏奈さんがレジデンスアーティストとしてフィンランド滞在中に制作した作品で、童話を見ているような気持になります。また雪が降ってきそう、作品は大丈夫？いえいえ、彼女はそんな事はお構いなしみたい！その姿に、自分の雪の日のワクワクも重なります。

ガイドスタッフＹ

ガイドスタッフ K

鈴木ヒラク　《sign wave》　2003

真っ黒な背景を横切る線は、何かのグラフのようでもあり、山並みのようにも見えます。

作者の鈴木さんは、この作品を今あらためて見てみると、「未知な土地にわけ入って、迷いながらも進んでいく歩行の軌跡」のようにも思えるそうです。この線は、枯葉の葉脈で出来ています。枯葉を並べて上から土で覆い固め、葉脈の線をたどって少しずつ、発掘するように描き出していきます。

元々は音楽を制作していた鈴木さんがドローイング作品を作り始め、とにかく必死だったという頃のこの作品は、24 歳当時のご自身の姿そのもののようです。

ハミッシュ・フルトン 《YUROK》 1980

ガイドスタッフ S

砂浜上に長く続く足跡の写真。作家は「歩く事自体がアートだ」というイギリス出身のハミッシュ・フルトン。世界各地を自らの足で歩き、その体験を旅の途中の風景写真や場所の情報・図形やテキストなどで示します。自らのアートの独創性を前面に押し出すのではなく、自然を壊すことなくその中に身をおき、自然や文化を感じながらただ歩き、歩いたという事実・歩いた地域を記録する。そんなフルトンの作品は、自らの足で歩き感じるリアルな体験や自然と共に生きることの重要さを私たちに教えてくれるような気がします。

長谷川潔の銅版画について

長谷川潔は 1891 年横浜に生まれ、1918 年に渡仏後、本格的に銅版画に取り組みました。銅版画は木版画と違い、彫った線が紙に刷られます。彫る道具や技法によって多様な表現が可能で、彼の作品もスケッチ風のものと、黒い画面のものがありますね。
黒い作品は 17 世紀に考案された、マニエール・ノワール（黒の技法）という技法で、19 世紀以降はすっかり忘れられていました。長谷川はこの独特の黒に魅せられて独学で研究し、色々な道具を考案して復活させたのです。黒い画面に自然の声や宇宙が浮かび上がってくるようです。

ガイドスタッフ Y

ガイドスタッフ U

駒井哲郎　《束の間の幻影》 1951

駒井哲郎は、10 代半ば雑誌「エッチング」で銅版画に出会い、西田武雄が設立した日本エッチング研究所で学びました。その後は銅版画を中心に制作し、写実的な描写、詩情溢れる緻密な描写、幻想的な抽象形態、鋭い線など幅広い表現を拡げていきます。《束の間の幻影》は、1951 年第一回サンパウロビエンナーレでコロニー賞を受賞した彼の代表作です。

戦火によって戦前の作品のほとんどを失った彼でしたが、この作品は、49 年に自宅が、50 年にはアトリエが完成し、作家活動を本格的に再開した頃のものです。優しさに満ちた楽しそうな幻の空間、わずかの間、漂ってみませんか。

ガイドスタッフ Y

日和崎尊夫の版画作品について

白い紙面の中の円形の世界。覗き込むとくらくらしそうな細かさです。これらの作品の舞台は、輪切りにした木の断面。その木が生きた時間が年輪としてあらわれた、その上を 1 秒に 4 ～ 6 回という速さでえぐる。こうした作業を暇なく繰り返し、生み出されたのが日和崎尊夫の木口木版という技法の版画作品です。作品名にある KALPA とは永い時を意味します。インドの言い伝えにある 1 カルパを地上の単位に換算してみると、何と 43 億 2000 万年！木の断面に涯（はて）ない時を刻みこんだ日和崎の時間。作品から時の穴に吸い込まれないよう要注意。

浜口陽三　《西瓜》　1955

西瓜のタネを見てください。黒に濃淡がありますね。西瓜の表面にあるタネと、果肉の奥の方から透けて見えるタネが表現されています。つまり、黒の濃淡で西瓜の立体感や奥行きが感じ取れるのです。浜口のこの技法は銅版画の「メゾチント」。銅板に細かい線を無数に刻み、インクを詰め込み、摺り取ることで、静かで深みのある黒の世界を表現しています。
また、浜口は色の版を重ねる「カラーメゾチント」の技術を開発した作家です。その評価の高さはこの西瓜の佇まいからご納得いただけることと思います。

ガイドスタッフＹ

浜田知明　《幼きキリスト》　1951

ハンモックで熟睡している幼児。幼児の後ろには母親なのか、洗濯物を干す女性。しかし、幼児のハンモックを吊るしている樹木にはキリストの象徴である魚の絵が打ち付けられていて、キリストの磔刑のようです。
画面左隅には飼い葉桶から餌を食べる家畜。これはキリストの生まれた場所を思い起こさせます。
画面右奥にはキリストが磔刑になったゴルゴダの丘を暗示するのか３基の十字架が立つ高台。
雲間からは天使の梯子のように地上に射しこむ光。
戦争体験を多くの作品として昇華した浜田ですが、謎めいた雰囲気があります。

ガイドスタッフＹ

舟越 桂 《遅い振り子》 1992

ツノのような髪。奇妙な場所から生えた腕は、タイトルとは裏腹にちっとも動かない。裏に回ると、どうやら胴体は胸と背中が逆になっているようだ。そして、どこか遠いところを見つめているような目。人のようでそうでないような、なんとも不思議な像だが、これは具体的なモデルがいるというより、作家が見聞きしたものや、作家自身のスケッチや言葉をかきとめた数々のメモからイメージが生まれるらしい。

「わかるところもわからないところも、いいところも悪いところもあって、いろんなものを抱えながら生きている」人間の姿がここにある。

ガイドスタッフ F

ガイドスタッフＯ

福田尚代　《翼あるもの》について

「ご本は大切に。折ったらいけません。」ママの声。いいえ大丈夫！福田さんは本を傷つけたりしません。本が大好きで、とても愛しています。読み終えた本を一枚ずつていねいに折ります。本の中へ入って行くように。展示ケースの中で美しく立っていますね。近寄って見て下さい。

散りばめられた沢山の文字の中から最後に残された文が浮かび上がります。思いがけない文字、偶然現れた文章。作品との対話を楽しんで下さい。本どうしのおしゃべりが聞こえるかもしれませんね。身近な物に温かい目を注ぐ福田さんの代表作です。

クリスチャン・ボルタンスキー
《D 家のアルバム、1939 年から 1964 年まで》 1971

タイトルの D 家、とはデュランさんというある家族のことで、1934 年から 1964 年のデュラン一家のアルバムから作家が 150 点写真を選んで左から縦に時系列順に並べたのがこの作品です。作家のボルタンスキーは父親がユダヤ系フランス人で、ナチス・ドイツからパリが解放された 1944 年に生まれました。自身は戦争やホロコーストを体験しなかったものの、作品の多くには濃厚な死のイメージが漂っています。写真の中の家族は楽しそうな笑顔を浮かべているのに、薄暗い美術館の白い壁に並んでいる写真を見ていると、どことなく不安な気持ちになるのは私だけでしょうか。

ガイドスタッフ S

クリスチャン・ボルタンスキー
《死んだスイス人の資料》 1990

これはとても大きな作品ですね。作者のボルタンスキーは 1944 年にナチス占領下のパリでユダヤ系フランス人として生まれました。両親や親戚から戦時中の厳しい体験を聞いて育ったと語っています。
近づいてみてみましょう。写真が貼られた沢山の缶が積み重ねられています。実はこの缶、フランスでは一般的なビスケットの空缶で、写真はスイスの新聞の死亡欄から切り取られたものなのです。
若い人も年配の人もいますね。誰にも訪れる死。缶の中には思い出や記憶、生きた時間そのものが入っているように思えます。

ガイドスタッフ Y

レベッカ・ホルン 《バタフライ・ムーン》 2008

5 分間待ってください。この作品、動きます。
真ん中にあるのはモルフォ蝶の羽根です。熱帯に生息し、強烈な日差しのもとに飛び交うチョウです。でもここで表現されたのは「月（夜）」と「葉の落ちた枝」、そして「ブルーメタリックの羽根」。見方によっては「死」を連想します。ホルンはチョウの羽根を動かすことで彫刻に命を吹き込もうとしているようです。多くの詩を作り、「文字を書くことと彫刻を作ることは分けられない」と語るホルンにとって、吊り下げられた青いペンシルは「詩」を象徴しているのかもしれません。

ガイドスタッフ I

アピチャッポン・ウィーラセタクン
《エメラルド [Morakot]》 2007

映画監督でアーティストでもあるアピチャッポンが、故郷のバンコクにあったホテル「モラコット」（タイ語でエメラルドの意味）を舞台に制作しました。ひと気のない客室には白い羽毛のようなものが浮遊して、あたかも会話をしているように見えます。音声はかつてこのホテルに滞在した人々の記憶。聴いている私たち自身もその記憶の共有者として作品の一部となってゆく、そんな感覚にさせられます。

ガイドスタッフ Y

宮島達男
《それは変化し続ける　それはあらゆるものと関係を結ぶ
それは永遠に続く》 1998

照明のない展示室に足を踏み入れ、奥でぼわんと赤い光を放つこの作品を見たとき、どんな印象を受けましたか？ 作品名の「それ」は作品そのものを指しています。変化し、関係し、続くこと。国境や人種といった枠組みを越えて共有できること。宮島作品で繰り返し語られるテーマです。
ちなみに今目の前にある作品は、2019 年のリニューアルオープンにともない、一部修復されたものですが、約 20 年の間に 1728 個のデジタルカウンターは明るさに個体差が生じ、点かなくなったものもあったそう。私はこれにも命のようなものや時間の流れを感じてしまうのです。

ガイドスタッフ F

アンソニー・カロ　《シー・チェンジ》 1970

「鉄」といえば硬く重い工業用の材料をイメージする方が多いでしょう。1959 年アメリカで見た抽象彫刻に刺激を受け、カロは鉄に赤や黄などの鮮やかな彩色を施し、台座を取り払い、軽やかで自由な形を生み出しました。新しい鉄の彫刻の誕生です。海の変化を表すタイトルの通り、明るいブルーグリーンの海、刻々と変化し、足元に打ち寄せる柔らかな波、穏やかな波の音が聞こえてきそうな感じがしませんか。お帰りの際には 1 階展示室入り口から外を眺めて下さい。カロの《発見の塔》が見えます。開館時からずっとここで私たちを楽しませてくれています。

みなさんは何を感じられますか？

ガイドスタッフ T

トミエ・オオタケ（大竹富江）《Untitled》 2008

ゆるやかに、のびやかに、自由に進む白い曲線。「見る人の感じ方を大切にしたい」と作品に題はつけなかったそうですが、あなたはどんなイメージをもちましたか？
オオタケは 1913 年京都で生まれ、ブラジルへ移住。独学で絵を描き始め、幾何学的な抽象絵画や彫刻を制作し、2015 年に 101 歳で亡くなるまでブラジルを代表する作家として活躍しました。
大正生まれのハイカラ女性が遥かブラジルで好きな道を極めて成功を修める、なんて素晴らしいのでしょう！
その精神が作品にも表れていると思いませんか。

ガイドスタッフＴ

鈴木昭男

《道草のすすめ -「点 音（おとだて）」and "nozo mi"》

2018-19

《点 音》は美術館内と敷地内に点在する 12 個の白くて丸いプレート。《no zo mi》は屋外展示場にある 5 つの階段状のもの。足とも耳とも見えるマークが目印。見つけたらたぶん乗ってみたくなる、そんな作品です。美術館で作品に乗っていいの？ そう思われるかもしれません。が、子どもの頃、駐車場の車止めブロックのような地面から少し高いところについ上ってみたくなりませんでしたか？ そんな気持ちのまま、ぜひ《点 音》に乗って、耳を澄ましてみてください。

12 の《点 音》の場所の地図もご用意しています。

手に入れて探検開始です！

ガイドスタッフ Y

アルナルド・ポモドーロ
《太陽のジャイロスコープ》 1988

直径約 4m！ 重量約 5 トン！ 建築や舞台美術も学んだイタリアの彫刻家ポモドーロらしいスケールの大きさです。大きさだけでなく二つに分かれた円盤に刻まれた深く鋭い裂け目のような形にも注目してみてください。天の星々の位置やその動きを知るためにつくられた中世の天球儀がヒントとなったこの作品、かつては 24 時間かけてゆっくりと回転していました。
今はこの空間で天気や時間によって変化する太陽の光を受けてさまざまに違った表情を見せてくれます。
さて、今日の空模様は？

ガイドスタッフ S